

ああ夏休み

2025.6.13

6月も中旬ともなると、そわそわしてくる。そろそろ夏休みの計画を立てなければならない。宿泊施設を予約するには、もう遅いくらいである。

ふと、子どもの頃を思い出した。小学生のときの夏休みだった。今一つ、夏休みになるという開放感がなかった。それはなぜか。夏休みならではの、夏休み特有の、嫌なことがあったからである。

ラジオ体操である。朝早くから、6時半からだったと記憶している。決められた場所まで歩いて行かなければならなかつた。これがけっこう遠かつた。ということは、6時半に間に合うようにと6時過ぎには家を出なければならぬ。子どもたちが集まり、例のラジオ体操をみんなでやり、カードにハンコをもらって解散となる。これだけのために、夏休みだというのに早起きをしなければならなかつた。ハンコ係の大人の方も大変だったことだろう。

ラジオ体操そのものには、それほどの効果があるとは思えない。どちらかというと、子どもを早起きさせるための口実だったのではなかろうか。休みに入った途端に、生活が乱れることを防ぐためだったのだろう。そう思いたい。

ラジオ体操が終わると、地区のソフトボールの練習があった。夏休みの終わりだったか、9月の上旬だったかは忘れてしまったが、地区対抗のソフトボール大会があった。それに向けて、夏休み中から練習をするのだった。

我が地区には、それほどの人数がいなかつたせいもあるが、小学3年生から練習に参加していた。3年生のうちは、みそっかすのようなものである。それでも楽しかった。4年生になった。どうやら試合に出られそうな状況となつた。そうなると、打順も大事だが、ポジション、すなわちどこを守るのかが最重要関心事となる。

あろうことか、キャッチャーをやれと言われた。嫌だ。こわい。目の前で、相手チームの選手がバットをブンブン振るのである。恐怖しかない。それでも、後ろにボールをそらすわけにはいかなかつた。だいたい、4年生だということの上に、身長はクラスで一番低かつた。的が小さすぎて、ピッチャーは投げづらかつたに違ひない。

下積みを終え、6年生ではピッチャーになった。花形である。ボールは速くはなかつた。だが、ストライクは入つた。あの当時、フォアボールを出さないことが重要だった。試合では勝つた覚えがないのだから負けたのだろう。

ラジオ体操とは違つてソフトボールの練習はよかつた。練習が終わると、いつも菓子パンと牛乳が出た。それが、うれしかつた。牛乳は、三角のパッケージだった。今となっては懐かしい。ソフトボールを教えてくれていたのは中学生だった。部活動に行く前に、コーチ役をやってくれていたのだろう。イサオくんという中学生だった。お世話になつた。

お盆が過ぎると、だんだんと憂鬱になつてくる。宿題をやつていなかつてある。自由研究に読書感想文、それに「夏休みの友」である。夏休みならではの嫌なことのオンパレードである。夏休み終盤は、これらに悩まされる。宿題が終わつていなかつて焦燥感、もうすぐ学校が始まるという憂鬱感は、夏休み特有の独特のものである。あの何とも言えない心持ちが懐かしい。ああ夏休みである。今年もまもなく暑い夏がやってくる。